



Title	パチプロ対談
Author(s)	小西, 真理子; 丈幻; マコト 他
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 176-193
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100172">https://doi.org/10.18910/100172</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 特集3

## 第13回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）

テーマ「パチンコ・パチプロの哲学」

## パチプロ対談

登壇者：丈幻、マコト、ガリバー、大川冬馬

司会：小西真理子

飛び入り：バイク修次郎

小西：ここからはパチプロのみなさんとの対談になります。司会是小西が務めます。どうぞよろしくお願いいたします。まず、登壇者の方々を紹介いたします。これから読み上げるプロフィールは、私がみなさんに事前に送っていただいたものです。特に形式は統一されていませんが、それぞれの内容をみなさんの個性だと思って聞いていただければと思います。お一人目は、丈幻さんです。

丈幻：はい、どうぞよろしく。

小西：よろしくお願いいたします。それでは、丈幻さんのプロフィールを紹介します。

1965年、東京都八王子市生まれ。中高生時代より音楽や映画演劇に没頭し、芸能界を目指す。20代から30代は飲食店勤務の傍ら芸能活動。30代後半で飲食店を起業するも、うまく立ち行かず借金を抱える。40歳のとき、借金返済のためパチプロに転身。借金完済後にパチンコタレントとして活動。その一環でギャンブル依存症問題にコミットするようになり、「社会派パチプロ」と呼ばれる。2014年、ギャンブル依存症とパチプロの対比をテーマとした劇映画『ザ・サンドイッチマン』をプロデュース。2021年、社会福祉士の国家資格を取得。「パチンコのための数学教室」という講座や、DMMオンラインサロン等でパチンコの勝ち方の伝授を約7年間行っている。現在の職業はイベント販売業／医療機器販売代理店／市民活動家。パチプロとしての活動は40歳から50代半ばの約15年間。現在59歳、ということです。

私は丈幻さんと出会ってからもう5年になりますので、これまでにいろいろなお話を聞かせてもらってきました。改めて、フォーラムに参加されているみなさんに向けて、丈幻さんがパチプロになられた経緯を教えてくださいてもいいですか。

丈幻：そうですね。もともと「三度の飯より博打が好き」でしてね。普通に仕事していても、やっぱりパチンコや競馬やオートレースをしたくなる、そういう時期がずっとありました。お金があると、結局ギャンブルに使っちゃうみたいなことをずっとしていました。

あと、もともと僕、数学が得意なんです。賭博マニアでありながら、賭博について理屈で考えている部分がありました。そういうわけで、パチンコについても勝つ方法があるということをわかってやっていました。勝つ方法について理屈はわかっていたんですけど、でも、それを実行するのってすごく手間がかかるのもわかっていて。そんなとき、僕、商売が下手だったんで、経営難になって借金を抱えたんです。「この借金を返す方法は、パチンコしかない」というか、「一番短期間で返せるのはパチンコ

を真剣にやることだ」という理屈にたどり着いたので、それでパチンコを真剣にやりはじめた、というのがきっかけです。

小西：ギャンブル依存症問題にコミットするようになったのは、どういう経緯だったんですか。

丈幻：今の話ともつながるんですけど、もともと僕が「三度の飯より博打が好き」というところからパチンコに入っているというところが大きかったです。勝ち方を知ってパチンコをする人たちのことも知っていたけれど、ズブズブにギャンブルにハマって借金をしてしまう人たちがいるという社会問題があるということもちらほら聞いていたんです。そんななかで、パチプロの劇映画を作る機会に出会いました。ギャンブル依存症者、つまり、ギャンブルでズブズブになっちゃう人とパチプロは、人種としてどう違うのかを対比した劇映画です。2014年に劇場公開して、2016年にDVDを発売しました。ちょうどそのころ、ギャンブル依存症問題が国会でもすごく取り上げられるようになっていました。IR法案（特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律）をどうするかということが、すごくクローズアップされていた時期だったんです。そういう時期だったので、「ギャンブル依存症」というキーワードを映画の宣伝文句に入れた方がいいなっていうね、商売っ気が出てきたんですね。劇場公開したときは、実はそこまでギャンブル依存症を宣伝文句には入れていなかったんです。でも、「ギャンブル依存症」という言葉を宣伝文句に入れたのはいいけれど、自分はそこまで依存症について勉強していたわけではなかったもので、真剣に勉強しようと思ったのがきっかけです。講義をいろいろ聞きに行ったり、勉強会みたいなところにも頻繁に顔を出すようになったりして。それがきっかけとなって、社会福祉士の資格もとりました。そんななかで、真理子先生とも知り合ったんです。真理子先生は依存症の勉強会で共依存の講義をされていたんですけれど、それを聞いて僕は感動しまして。そういう流れですね。

小西：私との出会いの経緯も話してくださって、ありがとうございます。

それでは、続いての登壇者、マコトさんを紹介します。よろしくお願いいたします。

マコト：マコトです。よろしくお願いします。

小西：それでは、マコトさんのプロフィールを読み上げます。1974年2月9日生まれ。1992年大阪大学入学。1997年、大阪大学中退。同年一人暮らしを開始、パチプロへ。2001年東京へ居を移し、現在。ということで、マコトさんは大阪大学の先輩ですね。

マコト：まさかまさかの！ 僕が阪大生だったときは、阪急石橋駅（現在は、石橋阪大前駅）の改札を出てすぐ左のところにあった「アイゼン（パチンコ店）」によく行っていたんですけれど。でも、今日、改札を通ったら潰れてて。「よう行ったな」と思っ

てまして。あそこが僕の大学だったんで。

小西：じゃあ、大学時代から結構パチンコに行かれていたということですね。

マコト：そうですね。

小西：どんな感じでプレイされていたんですか。

マコト：えっと、最初はただただおもしろかったんですよ。アミューズメントみたいな感じでやっていたんですけれども、やっぱりパチンコには金銭的な勝ち負けがある

じゃないですか。それでもうムキになって。「どうやったら勝てるのかな」って勝手に突き詰めていったら、「こうしたら勝てる」っていうのがぱっと出てきて。それからもう、「これは勝てるものなんや」とわかってきたんですね。そのときはそんなに勝つ金額自体は大したことなかったんですけど、僕は大学にいるよりもパチンコ屋さんにいる方がすごく居心地がいいと感じるタイプだったんです。大学で学びたいことがないまま、大学に入っちゃったタイプだったんで。「大学に一生懸命勉強して入ったのに、まだ勉強するのこいつら？」って、それをすごく不思議に感じていました。こういう感じで大学に入ったタイプだったので、あっさりパチンコの方に行きましたね。やっぱり19歳、20歳とかのころは、お金はそんなに手元にない時期でしたけれど、パチンコをするとお金が手に入るんで、それでもう一気にどっぷりって感じでした。

小西：ちなみにマコトさんは、パチプロ界隈で本当に本当に有名な方なんですよ。あるパチプロの方は、「マコトさんはパチプロ界の大谷翔平だ」と言われていました。パチプロのみなさんの集まりに参加したときに、いろんな人が「すごい金額を稼いでいる／稼いできた」「大阪大学の伝説のパチプロがいる」って教えてくださって、そんなふうに聞いていたら、マコトさんがその集まりにやってこられました。そのとき「あの人かー！！」と思ったのを覚えています。（登壇者や会場のパチプロのみなさんが頷く）ほら、見てください。みなさん頷かれていますよ。そういうことなんです。すごい方なんですよ。

マコト：大阪大学のパチプロ。たぶん、次は彼（フォーラムに参加されていた大阪大学の学生でパチンコ遊技者の方）になるかもしれません。

小西：マコトさんはパチプロ歴27年ですね。その間、ずっとパチンコで食べてこられたということなんですね。コメントありがとうございました。

それでは、続いてガリバーさんです。よろしくお願いします。

ガリバー：ガリバーです。よろしくお願いします。

小西：それではガリバーさんのプロフィールを読み上げます。スリランカ生まれ。幼少期はシンガポール、小学校の半分は香港で育つ。明治大学中退（ゴルフ推薦入学）。2008年、22歳のときに怪我でゴルフを断念し、パチプロになる。パチプロ第1期（2008年から2010年）の後、3年間のゴルフレッスンの仕事を経て、パチプロ第2期（2013年から2018年）に突入。丈幻さんと出会い、彼の影響もあり、2018年にパチンコ店へ就職。一昨年に退社し、現在、第3期（2022年から現在）パチプロ（瀕死）ということです。生まれが日本ではなく、長い期間を諸外国で過ごされたということですからけれども、文化差とかを感じることはありましたか。

ガリバー：覚えているのが小学校の香港からで、スリランカとシンガポールは物心がまだついていなかったんで、ちょっとわかんないですけど。でも、やっぱり、ちょっと香港とか、他の海外とかと日本は違うなっていうのは、そのときから思っていましたね。

小西：先ほど、フォーラム前の打ち合わせのときも話したんですけど、パチプロの方々、今回登壇いただいている4名の方々、そして、私がインタビューで紹介した2名の方々、大学中退率がすごく高いですね。大学中退率が50%です。大学に居心地の悪

さみtainなものとか、おもしろくなさとかあったんですか。このフォーラムは大学のイベントなんですけれども、ちょっとおうかがいしたいなと思いました。

ガリバー：いや、ゴルフ部の監督と喧嘩しただけなんです。

小西：え、喧嘩ですか！？

ガリバー：スポーツ推薦で大学に入ったんで、もともと勉強する気も、卒業する気もなかったんですよ。それが監督にバレて怒られて。もともと僕はガチガチでゴルフをやっていたんですけど、その部活はエンジョイ派のところだったんですよ。そんな感じだから、親に「大学やめる」って言ったら、「じゃあ学費がもったいないから前期でやめて」って言われて。3か月でやめちゃいました。

小西：3ヶ月！？ それは早いんですね！ ガリバーさんは、元プロゴルファーだとおうかがいしていますが、プロになられたのはいつですか。大学をやめたときからでしょうか。

ガリバー：大学をやめた次の年、20歳のときからかなと思います。プロゴルファーの定義というのは、僕にとっての「パチプロの定義」とも関係するんですけど、20歳のときに、あるゴルフの予選会を受けてそれを通過したんです。僕自身は、その時点で「プロ」になったと思っているので、20歳のときに「プロ」になりました。

小西：もうひとつおうかがいしたいんですけど、プロフィールにある「丈幻さんと出会い、彼の影響もあり、パチンコ店に就職」っていう流れについて教えていただけますか。

ガリバー：僕と丈幻さんは地元が一緒に、行きつけの居酒屋まで一緒に、その居酒屋で偶然出会ったんです。そこでいろいろお話ししたんです。そのときは、ギャンブル依存症のIR法案がちょうど話題になっている時期でした。パチンコがもともと好きなので、パチンコ業界がすごく叩かれているっていうことに、違和感というか、モヤッとしたものがあったんです。じゃあ自分に何ができるだろうって考えたときに、コンサルタントっていいなと思いました。自分の知識をパチンコ屋さんに提供して、少しでもよりよくできればっていうのを丈幻さんにお話ししたら、「お前、パチンコ屋で働いたこともねえくせに、そんなことできるわけねえだろ」って言われまして。そこで「なるほど」って思って、次の日にパチンコ屋さんの就職に応募しました。

小西：そうだったんですね。ありがとうございます。

それでは、続いて、大川冬馬さんです。よろしくお願いします。

大川：大川です。よろしくお願いします。

小西：それでは大川冬馬さんのプロフィールを読み上げます。2014年、『パチンコ必勝ガイド』ライターとして活動開始。同時にパチプロとしても活動する。2017年、彼女との結婚を考え、安定を求めてサラリーマンに。2018年3月、飲食店社員になると同時に麻雀プロの道へ。2018年9月、あまりのブラックさに耐えられず、麻雀屋の店員となり、趣味を仕事に。現在に至る。パチプロとしての活動は、兼業（パチンコ・パチスロだけではなく、副業を掛け持ちして生計を立てるパチプロ）が基本。転職活動中や働くのに疲れた期間には、専業のパチプロとして活動する。

ライターとパチプロを兼業されていたこととか、ライターのお仕事に関するエピソード



ドを教えてもらってもいいですか。この会場には、ライターのお仕事について知らない方もいらっしゃると思うので、どういう感じで働かれていたのか教えていただきたいです。

大川：みなさんがライターについて、どのくらいご理解いただいているかちょっとわからないんですけど、先ほどお話にもあがりました〔松崎かさねさんの発表で名前をあげられていた〕バイク修次郎さんと同じ雑誌『パチンコ必勝ガイド』のライターをしていました。僕はバイク修次郎さんの後輩に当たるんですけど、やっぱり若手ってそんなに仕事が多くなってですね、雑誌の収入だけでは生活していけないということで、お仕事の日以外をパチンコで稼いで生計を立てていたといった感じになりますね。

小西：どんな記事を書かれていたんですか。連載とかですか。

大川：連載は最後の方にちょっとももらえたりもしたんですけど、基本的には機種の演出についての記事です。「この演出が出たら何%当たりますよ」みたいな記事。ほかにも、たとえば、バトルというか、みんなで収支を競う企画であったりとか、雑誌の付録になっているDVDの撮影に呼んでいただいたりとかということもありました。

小西：現在は、麻雀プロをされているんですよね。ギャンブルというジャンルが好きなんですか。パチプロと麻雀プロにはどのような繋がりがあるんでしょうか。あるいは繋がりはないとか。そのあたりの関係を教えてくださいませんか。

大川：ギャンブルが好きというか、頭を使うゲームが基本的に好きなんです。パチンコも、僕からすると頭を使うギャンブルというよりも、ゲームっていう認識です。もしかしたら競馬とか競艇とかもそうなのかもしれないですけど、僕はそういうのはほとんどやったことがなくてわからないです。パチンコも麻雀も、親とか、おじいちゃんとか、家族の影響で好きになったものでもあるんです。パチンコは特に、最初から勝てるものだと思ってやっているの、パチンコにあんまりギャンブルって感覚が僕には正直ないですね。

麻雀もおじいちゃんの影響で好きになりました。ライターをやめるときに「どうせだったら趣味を本気でやろうかな」と思って、麻雀プロになりました。パチンコとはちょっと違うんですけど、麻雀も負けるものだとか基本的に僕は思っていないです。ギャンブルっていう認識が、正直あんまりないですね。パチンコも麻雀も、ギャンブルって言われてしまうと、うーんっていう感じになります。

小西：パチンコをギャンブルとして認識されていないということは、パチプロの方々のひとつのポイントかもしれませんね。どうもありがとうございました。

ここからは対談、つまり、クロストークに移りたいと思います。まずはご登壇いただいているパチプロのみなさんに、ここまでのフォーラムの内容を受けて思ったことを自由にお話ししていただきます。フォーラムの第一部（パチプロ対談はフォーラムの第二部）では、研究者が3人（小西真理子、松崎かさね、溝越大秦）発表したり、そのあとに質疑応答があったりしました。何か気になったことがある方はいらっしゃいますか。

丈幻：第一部の質疑応答のことでね、ちょっと僕、補足しようかなと思います。「ギャ

ンブルがいろいろあるなかで、今日のテーマはなぜパチンコなんですか」っていう質問をされた方がいらっしゃいました。今日は、「プロの生き方」ということで、倫理だったり、哲学だったりというのがテーマなんですが、そのなかでパチプロがテーマになった理由を考えたときに、日本で存在するプロギャンブラーの人数的に、圧倒的に多いのがパチプロだからだと思います。そういうこともあって、パチプロは周縁的な存在であるかもしれないけれど、同時に発掘されやすいし、調査しやすいというところもあります。実際、競馬・競輪・競艇・オートレースでプロが存在するかっていうと、まずいません。

「まずいない」っていうのは、ごく一部、いるにはいるんです。かなり前、5、6年ぐらい前かな。競馬の投票で3億か4億円ぐらい脱税して捕まった人がいたというニュースがありました。それはそんじょそこらの素人ができることじゃないです。ものすごく正確な予想と、あとオッズ表の画像を認識して、瞬時に計算するプログラムを組まないといけない。あの捕まった人はプロですね。競馬・競輪・競艇・オートレースのプロは、僕の知る限りいないです。

あとギャンブルといえば宝くじがありますが、宝くじのプロ、いるわけがないんです。宝くじは客側が勝つ方法がない。それ以前に控除率<sup>1</sup>が高すぎます。非合法のギャンブルならばプロがいるかと言えば、それはますますいるわけがない。たとえばゲーム機<sup>2</sup>とかありますけど、これも胴元の取り分がとんでもないので〔客が〕勝てるわけがない。非合法カジノで食っているプロというのは、強いていえば胴元です。その人たちは表に出て来れるわけがないでしょう。そういう意味で、合法的に食ってるプロギャンブラーで、世の中にたくさんいる、しかも表に出てこれるのは唯一、日本ではパチプロだけなんです。

パチプロの人数がどのぐらいいるかっていったら、昔1万人ぐらいって言われていました。今はデータがないから、わからないです。でも、今はたぶんちょっと減っていると思います。たぶん、6000人か7000人か8000人ぐらいじゃないかなと、僕は思っていますけれど。それでも相当の数のパチプロが、現在まだ存在しています。パチンコで生計を立てているプロが、相当数いるんですよ。

もうひとつね、真理子先生の発表で「パチンコがセーフティネットになっている」という話が出ていたじゃないですか。質問でも、このことについて触れられていましたよね。いろんな意味でのセーフティネットっていうのが幅広く存在するんですけど、ひとつヒロシ・ヤングさんっていう方が明確に言ってくれていることがあります。ヒロシ・ヤングさんは、パチンコ業界の評論家としてもものすごく有名な方で、さきほど（松崎）かさねさんの発表で紹介された動画にも出られていましたね。その方が評論のなかで、「パチプロっていうのはね、社会不適合者の受け皿としてはすごいんだよ。だって、パチンコをやって生きていくなんていう方法がなかったら、たぶんホームレスか犯罪者になっていたであろう人間の受け皿として機能しているんだから、これは

<sup>1</sup> ギャンブルの胴元が手数料として取る金額の比率のこと。

<sup>2</sup> 暴力団等が経営する闇カジノのこと。

すごいでしょう」ということを言われていました。社会不適合者というか、僕も含めて、そういう受け皿として機能しているっていうのがあります。それは僕も正しいと思う。

小西：みなさんのなかでパチンコに助けられた経験とか、セーフティネットとしてのパチンコに関連したご意見をお持ちの方はいらっしゃいますか。パチプロとして生きるなかで、「パチプロであるということがセーフティネットになっている」というふうに自身が感じたことがあるか。そうではないという話も含めて教えてください。

マコト：僕の場合はね、セーフティネットっていうよりは、自ら進んでパチプロになったタイプなんで、ちょっとそういう〔パチプロが自分にとってのセーフティネットだという〕感覚はないですね。パチプロというものを通して僕がけっこう早めに分かったのはですね、資本主義の縮図というかね、そういう世の中の基本的なお金の流れみたいなものです。若い頃にパチンコ屋にいたからこそ、そこに気づくのは早かったのかなと。だから、今で言うところの投資詐欺とかああいうね、儲け話を餌にして釣ってくるようなものに対して見抜く力、心眼みたいなものは早い段階で育っていたと思うんですよ。だから、やろうとすれば〔自分も〕騙す側ができるっていうのは分かったんですけど。でもそこはね、僕は聖人君主なんで！そっち（騙す側）<sup>3</sup>には行かずに、あくまでも自分はエンドユーザーとして！っていう感じで。そういう観点ではある意味、自分にとってのセーフティネットと言えなくはないかもしれないけど。まあ、何というかな……。そういうことです。

大川：セーフティネットっていう話を聞いてそういう面もあるなと思ったんですけど、僕とか周りの人たちに関しては、あんまりそういう感じでもないのかなとも僕は思っています。僕も社会不適合者ではあるんですけど。雑誌のライターという肩書きは一応ありましたけれど、パチンコで生活する者だとも思っていました。思っていたのはいたんですけど、当時のことを振り返ってみると、別に働くことがいやっていうわけでもなく、「パチンコの方が儲かるしな」ぐらいの感覚だったんです。「働けないからパチプロになった」みたいな感じではなく、「働けと言われれば働けるけれど、まだいいや」ぐらいの感覚でした。でも、ある意味、そういう「働かなくてもいいや」っていう人が辿り着く場所な気もするんですよ。そういう意味では、大きくいうとセーフティネットなのかなっていう気もします。

小西：他の方もどうですか。セーフティネットについて、あるいは他の話を聞いて思うことはありましたか。

ガリバー：さっきの自己紹介の話を少し補足したいです。プロゴルファーの定義って、

---

<sup>3</sup> ここでの「騙す側」とはパチンコ店のことを指している。この意味を理解するためには、ギャンブルの大前提として、胴元と賭ける側のどちらもギャンブラーであるということを認識する必要がある。そういう意味で、胴元の役割を果たす企業、たとえばJRA（日本中央競馬会）は、「自分が必ず勝つ方法でお金を得ている」側であり、「騙す側」ということになる。パチンコは法律で遊技とされてはいるが、このような賭博のメカニズムでパチンコをとらえるならば、株式会社マルハンなどのパチンコ店も「騙す側」という位置づけになる。マコトさんは「騙す側」であるパチンコ店は、無知なユーザーから収入を得る立場にあるが、自分はそのような弱者からお金を取るのではなく、強者であるパチンコ店からお金を得るというあり方を重視していると主張されているのである。



たぶん意外とみなさんご存知ないと思うんですね。日本はプロテストっていうプロ資格を得る免許を取るための試験があるんですけど、海外では資格テストっていうのがほとんどないですよ。じゃあ、どうやってプロになるかというと、「僕、今日プロゴルファーになります」って言ったら、そこからなれるんです。何が違うかっていうと、賞金をもらえるかももらえないかだけの差なんです。アメリカの試合に行ったとき、一緒に回っていたやつがめちゃくちゃ下手だったんですよ。でも、胸張って堂々と「俺はプロゴルファーだ」って言っていました。なので、「いくら以上稼いでいたらパチプロだ」とか、「こういう立ち回りをしていたらパチプロだ」とかじゃなくて、自分で「パチプロだ」と言ったら、もうパチプロでいいじゃんっていうのが僕の考えなんですよ。もし収支がマイナスだったとしても、別に言いたきゃ言えればいい。なのでなんか、あんまりパチプロのことを定義づける必要性はないのかなと、僕は常々思っています。

小西：パチプロの定義についての見解ですね。先ほどの松崎さんの発表でも話題になっていましたね。この定義に関しても、パチプロや周辺の方々各々によって振れ幅があるように感じています。ガリバーさんは、自らがパチプロと名乗ることに重点を置かれていますね。それに対して、第一部の質疑応答では「それなりの稼ぎがないと、むしろかなり夢があるくらいの儲けがないとパチプロだとは思えない」という意見がありました。この二つは両極の話ですね。そのあいだにあるような話も何度か聞いたことがあります。

あるいは、パチンコで生計を立てているけれど、自分のことを「パチプロ」とは呼ばないという方々もいらっしゃいますね。私がインタビューした方のうちお一人は、ご自身のことを「パチンコ生活者」と呼ばれていましたし、他の方も「自分のことをパチプロと定義するのはおこがましい」「儲けの金額というよりも、何かこだわりがあって突き詰めている人がパチプロだ」というようなことを言われていました。パチプロの定義をめぐる話だけでも、実はかなりの幅と深みがあるように思います。

マコト：パチプロは基本的には、確率×期待出玉を計算していて、まあそれが「期待値」ということになるんですけど。その取り分<sup>4</sup>からコスト（投資額）を引いた金額がパチプロの給料になってくるわけですね。たぶん、多くの人たちに知られているパチプロさんのもっとも多い稼働スタイルというか台選びの方法は、いっぱい回る台を選ぶやり方、つまり、それによってコストのところをできるだけ少なくする方法ですよ。そうすれば、当たったときに残る玉がいっぱいある。トータルの引き算の差が大きくなるから儲かるってことです。それが一応、ほとんどのパチプロさんの稼働スタイルなんですね。

でも、僕なんかはちょっと違うやり方なんです。パチンコの勝ち負けってのは「(当たり) 確率」と「出玉 (払い戻しの球数)」の関係性で決まるんですけど<sup>5</sup>、僕なんかは出玉をいじっちゃうタイプなんですよ。確率はどうやっていじれるかって言うと、さっきもメーカーの発表が320分の1であるとか、たとえばそういう話もあったと思う

<sup>4</sup> 当たったときに得られる出玉＝金額。

<sup>5</sup> 「確率に見合った出玉よりも少ない払い戻しを設定するので店は利益を出せる」という意味。

んですけど。そういうデジタル的な確率<sup>6</sup>も確率のひとつの要素ではあるんだけど、もっと……えーっと……パチンコの〔トータルの〕確率のなかには「入賞率」とか他の要素も実はいろいろと含まれてまして。僕はそっち（入賞率等）に介入しちゃう。そこに介入しちゃうえば、出玉を〔店が想定したものよりも〕たくさん出せる場合があるんです。確率自体をねじ曲げられる場合も、一部の機種ではありますけどね。

〔デジタル抽選の〕確率自体はメーカーが作り上げてきた数字なんで、店はいじれない。店がいじれるのはコスト<sup>7</sup>の部分だけなんです。そこにメスを当ててがさって<sup>8</sup>、ここを当てちゃえば店が〔一般客の〕コストを想定して、いくら回らない台を作ろうが、あの……そもそもの期待出玉みたいなのが大きくなるんで。そこにも技術介入とか思考を集約させて、パチンコ屋さんからお金を取るというか稼ぐというかね。そういうスタイルを僕はずっとパチプロだと思っています<sup>9</sup>。

それはなんでかっていうと、店の言いなりになりたくないっていう部分がどこかあってですね。そういう部分に抗うなかで勝っていくということをしていきたい。結局、コストが低い台を取るっていうことは、お店さんが釘を開けて用意してくれている台で勝つということなわけです。そういうこともできるんですけども、それをやってしまったら違うかなと。結局、お店は一般のお客さんに対して釘を開けているということが圧倒的に多いんで、僕みたいなパチプロがそれを打つのは業界的にも良くないんじゃないかなと。そういう台をどんどん奪っていくと、エンドユーザーの勝ちに対する経験が少なくなるだけなんでね。僕にとってのプロフェッショナルリズムっていうのは、さっき言ったようなやり方のなかに詰まってるんじゃないかなと思ってずっと追求してきました。

でも、昨今のパチンコ業界における機械の市場とか、機械を作るメーカーさんによるパチプロ対策とかを経て、なかなかそういう〔プロ仕様の〕台は僕らも打てなくなってきたんで。その意味では、パチプロは今、隅っこに追いやられている立場ではあると思いますよ。

丈幻：今のマコッちゃん（マコトさん）の話に関連してつけ加えます。ギャンブルっていうのは、まず、出資額があるわけです。その出資額に対して当たったときに見返りがくるでしょ。店側は「このぐらゐの出資額に対して、トータルの見返りをこのぐらゐしか返さない」というふうに見積もっていて、そうすることで店が儲かるって

<sup>6</sup> コンピュータが乱数をランダム抽選する確率のこと。

<sup>7</sup> 客が一回の抽選を引くために必要な金額のこと。

<sup>8</sup> 「がさる」とは「探す」という意味の用語である。

<sup>9</sup> この部分の内容を理解するためには、以下の基礎知識が重要なポイントとなる。まず、パチンコの勝ち負けは、①投資額（コスト）、②出玉（当たった時の払い戻し）のどちらが多いかで決まるという前提がある。ここでマコトさんは、「一般のパチプロは①を節約する方法で稼ぐけれど、自分は②を増やす方法で稼いでいる」と言っているのである。言い換えるなら、「一般のパチプロは投資を節約する方法ばかり考えるけど、自分は当たったときの取り分を増やす方法を考えて実行している」ということである。実際にパチプロがやっていることは、コストを減らすことと出玉を増やすことであり、機種によってはその両方を行っている。

う理屈があるんですよ。でもパチプロは、店が想定したコストを削れる方法を考えちゃう。または、店が「このぐらいしか出さない（見返りをつけない）」と見積もっているのに対して、もっと出しちゃう。「そういうことを俺たちはできるぜ！」というのもある。そのどっちか、もしくは両方同時にできればなお良いんです。僕らは儲かるんです。店が想定しているところの盲点をつくことを僕らはやっている。端的に言うと、店の想定以上に勝ってしまうのが、パチプロなんですよ。それがパチプロの定義かな。

定義の話はこのへんにして、「パチプロ」っていう職業名というか肩書きのことなんですけど、実は自分ではその肩書きを名乗りたくない人って結構多いんですよ。さっき、かさねさんの発表のバイク修次郎さんの話で「パチプロっていう呼び方、いかがやねん」っていう話があったけれど、結構ね、半分以上っていうか、7、8割、もっと9割ぐらい、ほとんどみんな自分のことパチプロって言われたがらないですよ。バイク修次郎さんはパチプロと呼ばれるのが嫌いだけれど、便宜上仕方がなくパチプロというくくりを受け入れているんです。テレビと一緒に出ている仲間のなかにも、パチプロという言われ方を嫌がって「パチンコ遊び人」とか「パチンコ職人」だって自分のこと言っている人がいます。僕も「パチンコ研究家」って名乗っていた時期もあります。

あともう亡くなったんですけど、池上蓮さんっていう有名な伝説のプロパチンコライターがいて、この人は自分のことを「プロパチンカー」って言っていました。あと、自伝みたいなのを描いていたパチプロの星沼良晶さんは、「僕はパチプロって自分のことを言うのがどうも抵抗があって「パチンコ生活者」というふうに言っている」と言っていました。みんなね、パチプロって言われたがらない、言いたがらない人がほとんどね。「俺、パチプロじゃ」って堂々というのは、マコッちゃんぐらいですよ。案外そうですよ。

マコト：まあ、そうかもしれない。

丈幻：この話、修さん（バイク修次郎さん）も呼んだ方がいいですよ。さっきからなんか喋りたそうな顔をしてるの。来てください。

（バイク修次郎さんが、会場から登壇席に上がって来られる。）

丈幻：さっきのセーフティネットの話とかも、なんかしゃべりたそう感じだったよね。実はね、僕がメディアの世界に入るきっかけを作ってくださったのはこの方なんですよ。僕はこの方には頭があがらないんですね。バイク修次郎さんです！

バイク修次郎：（サングラスを外される）バイク修次郎です。よろしくお願いします。普段はこんな顔をしたただのおじさんなんですけれど、メディアに出るときにはサングラスをかけています。ここからサングラスをかけますね。

セーフティネットといえば、私はもともと完全なるパチンコ依存症だったんですよ。小学校低学年のころに父がパチンコ台を買ってきてまして、「お前、これで遊べや」って言われていました。手打ちの台が、家にあったんですよ。そこからはまってはまって。でも勝ち方がわからず、自分の小遣いも、バイト代もつぎ込んで、そこから30歳まで負けまくって、トータルで700万円ぐらい負けたんです。それで、最後、自殺しようと思っ

たんですよ。これ真面目な話です。このことは、本当にあんまり言わないんですけど、本当に自殺を考えたことがありました。極論、世の中からパチンコがなくなるか、俺がなくなるか、どちらかになればいいと思っていました。でも、死にたくない、死ぬのは勇気があるから。そうなったときに、世の中にはパチプロってというのがいるから、勝ち方をマスターすれば死ななくてもいいし、勝ち続けられればパチンコも永遠に打てるんじゃないかと思って、じゃあやってみようと思いました。最後は本当に命がけでパチンコ台とか、釘を調整するハンマーとか、全部自分で買いました。

当時、昭和&平成初期の時代は、パチンコが今よりもっとメジャーだったんですよ。メディアにも出ていました。民放のテレビ番組でもやっていました。あと、本屋さんにはパチンコの雑誌本とか釘の調整本がいっぱいありました。それを買って、独学で学んで、なんとか勝ち方を覚えて、1年目の収支が200万円くらいになりました。2年目に現場のパチプロさんと知り合って、収支が700万円に上がったんですよ。そこからもうずっと勝ち続けています。途中で『パチンコ必勝ガイド』っていう雑誌の先輩ライターに出会って、「お前、記事書いてみろ」って言われて書いて、今に至ります。あとは自慢じゃないけれど、僕はパチンコで日本1周した初めての人間だと思います。その後、もう1周しました。日本2周、全県のパチンコを打って全県で勝ちました。自慢しました、すみませんね。

小西：パチンコで生計を立てている人の呼び方って、パチプロに限らずいろいろあると思います。パチンコで生計を立てようと思った理由も多様であるし、なかにはパチンコがセーフティネットとして機能している人もいます。そういう多様さや、パチンコのよさというのって、特にギャンブル依存症のイメージが先行してしまうと見えづらいものになってくるかと思います。パチプロとか、パチンコ、ギャンブルなどなどに対して世間の認識とのあいだに何かズレを感じるということがあれば教えていただきたいなと思います。大川さん、どうですか。

大川：そうですね。パチンコって、他のギャンブル、たとえば、競馬とか宝くじとかと比べると、還元率、つまり、1円に対して何%、0.何円返ってくるとかっていうのが、一番いいんですよ。もちろん還元率が100%超えることは、パチンコ屋が経営していけなくなるんでないんですけど、ギャンブルのなかでは還元率がまともな方なんですよ。しかも、パチンコでは相手が機械であるということがポイントです。もちろん釘の調整とかがあるんで、〔相手の〕大元はお店なんですけれど。でも、相手が機械であるからこそ、パチンコを打つ技術で差がつく、技術介入する余地があるっていうところが、パチンコの特徴だと思います。パチンコって負けるものだと思います。いる人が多いと思うんですけど、一番簡単に勝ち組になれるギャンブルなんですよ。みなさんがパチンコ・パチスロについて、どういう印象を抱いているかちょっとわからないんですけど、一番やりようがあるものだと僕は思っていますね。そこが世間の認識と、結構ズレているところかなと思っています。

ガリバー：パチプロに対する世間の認識は、たぶん、「怠け者」、「働きたくなくて遊んで暮らしているヤツ」という感じだと思うんですね。別にそのことは特別否定しないんですけど、そういうふうな眼差しがあることを知っているからこそ、僕は社会人とし



て働こうと思ったっていう部分もあるんですね。「パチプロだからできないんだ」とか言われるのがすごく嫌だったんです。なので、ゴルフのレッスンをしていたときも、パチンコ店で働いていたときも、「ただの遊んでいる怠け者が入ってきたよ。こいつ仕事できねえよ」ってならないように、結構一生懸命やっていました。そのおかげでわけじゃないですけど、結構トントン拍子に上にはあがれたんです。

でも結局、最後には、「パチプロは社会不適合者」っていうふうになる部分もありますね。パチンコって結局、個人スポーツなんで、自分個人がやった分だけ返ってくところがある。それに、他の人に邪魔もされないんですね。協調性のなさとかがあってもパチンコはできる。協調性に乏しかったところが、僕が仕事をやめた一番の理由でもあります。丈幻: さっき冬馬が言ったね、パチンコが一番勝ちやすいギャンブルだっていうことと、さっき僕が言ったパチプロがプロギャンブラーのなかで圧倒的に人数が多いっていう話はね、共通するわけですね。ここちょっと補足します。競馬、競輪、競艇は、控除率25%なんです。控除率っていうのは、胴元が最初から、つまり、投票されたところ（客が賭けた金額）から抜いている金額のことです。当然のことです。経営しなきゃいけない、儲けを出さなきゃいけないから、まず抜くわけですね。25%は大きいでしょう。オートレースに関しては30%抜いてます。7割しか返してないんですよ。宝くじなんてね、とんでもないですよ。半分以上、控除ですからね。僕からしたら勝てるわけがないんですけどもね。控除率の逆を還元率って言います。25%控除を抜いたとしたら、75%は返してるわけです。この還元率が圧倒的に高いギャンブルが、実はパチンコなんですよ。その時点で、〔公営競技や宝くじと比べたらパチンコは〕勝ちやすいんです。

あとね、話がちょっと発展しちゃうんだけど、もともとなんでパチプロみたいな人が存在するかっていうと、この控除率が高いことと、もうひとつ大きな理由があるんです。「交換ギャップ」です。パチプロみたいな人がいる理由というか、一般の人とパチプロの思考の違いの話かな。パチンコ屋さんは、1玉4円で玉を貸し出しますね。でもその玉を今度交換してもらう<sup>10</sup>ときにはね、ほとんどのお店は4円で交換してくれないんです。基本的には、特に昔は、4円の玉が2円50銭とか、3円とかで戻される（払い戻しをする）んです。ここがポイントなんですよ。一般の人は、勝ったら勝ち逃げしたいから、大当たりでたくさん玉が出たらさっさと逃げちゃうんです。でもパチプロは逃げないんです。なんでかっていうと、実はその玉って、使い回せるからです。最初投資するときは、1玉に対して4円出して玉を借りる。でもね、当たって出した玉ってもう1回、そのまま使い回しができるんですよ。一般客は玉がいっぱい出たらそのまま換金して勝ち逃げしたくなっちゃうんだけど、パチプロはその玉でもう1回、パチンコをやるんです。だって、どうせ3円しか返してくれないでしょう。だったらもう1回、そのパチンコの玉で打ち込んだ方がいい。当たる前は4円で借りてたものを、今度は3円で同じ投資ができる状態を手に入れたことになるわけですよ。そのほうが圧倒的に得しているんですよ。

パチプロ用語で「持ち玉比率」っていう言葉があるんです。一日打ち込んだ玉（投

<sup>10</sup> パチンコ客が出玉を換金すること。



資に使った玉)のなかで、現金投資した玉(4円払って借りた玉)と持ち玉(当たりで得た玉を使い回ししている分)を使った分の比率のことなんですけどね。現金投資の玉が多ければ多いほど不利、持ち玉を多く使うほど有利ということになります。パチプロにとっては、一にも二にも、とにかく「持ち玉比率」を上げることが大事なんです。パチンコ屋の営業時間は13時間とかですから、朝から行って一日中打っていた方が絶対得なんです。普通はパチンコを丸1日なんて打たないでしょ。パチプロは13時間打つんです。暇人がパチプロになりやすいのは、一日打てるという強みがあるからです。でも、その理屈を一般の人はなかなか理解しない。理解しないのは、博打好きほど、いっぱい出して勝ち逃げしたいという気持ちがあるからなんです。

今日の溝越さんのお話で、「人はなぜオカルト打法にハマるのか」という話がありました。実は僕が思っていた話とはちょっと違ったんだけど、そういうことが関係するのかなと思っています。ギャンブル好きな人ほど、負ける方向に行くんです。ギャンブル好きな人とパチプロは、玉を持っているときに思っていることが違うんです。パチプロは玉をいっぱい持っていたら、「これやめらんないじゃん、閉店まで」って思うんです。なぜかという、持ち玉有利な時間を長くしたいからです。一般のただの博打好きは「玉を持っていると勝っている」って思っているんです。それで「勝ち逃げする」方向に行っちゃうんです。

あと一般の人って偏りを無理矢理見つけたがるんです。パチンコの確率というのは、偏って当たり前なんです。10円玉を投げて、表か裏かってするときに、10回投げて、裏表が裏表裏表裏という感じに均等に出る確率なんて、1024分の1しかないんです。どこか偏るのが当たり前、偏る確率の方が圧倒的に高い、偏らないで均等に出る確率の方が圧倒的に低いんです。でも、その偏りに対して「何かある」っていうふうに無理矢理思いたがる人が多い。なんかその偏りに対して法則性を見つけようとするけれど、偏りの法則などないんです。全然科学的根拠のないことを思いたがること、これもオカルトのひとつです。そういうことは一切排除して、数字だけで機械的にやっているのかパチプロです。

小西：ギャンブル好きな人と、パチプロでは、パチンコで勝つこと、勝っていることに関わる思考にズレがあるということですね。一般ユーザーの遊び方の方が、メーカー側の意図に乗っ取った遊び方かと思いますが、パチプロはメーカーが提供しているという意味での娯楽や、仕掛けに乗るのではなく、あくまで機械がどうなっているか、確率論的にはどうなるかということを中心に考えているという印象を持っています。パチプロそのものに対する世間の認識のズレについては、みなさんどう思われますか。

マコト：リアルな社会で「自分はパチプロだ」などと言ったら、どんな感じなんだろうね。ネットではかなり叩かれるよね。匿名的なところでは、「税金払ってへんやろ、お前ら」とか言われているみたいだな。

丈幻：あのね、叩かれる理由は、三つなんです。ひとつ目は、脱税野郎という批判、二つ目は、パチンコは違法賭博であるという批判、三つ目は、もうただ単純に社会のクズだという批判です。この三つですよ、叩かれるのは。

マコト：まあ、社会のクズっていうのは、ほっといてくれって感じ。

丈幻：そうそう。もう認めればいい。ほっといてくれ。

マコト：脱税はしていないし、違法賭博もしてないよ。それで叩かれて、SNSとかではちょっと肩身が狭く感じることは多いですけどね。でも、リアルで話をしたときそんなに煙たがられることはないかな。やっぱり、パチプロって孤独なんで、SNS弁慶な人も多いんですよ。SNSで叩かれて落ち込んでということをひたすら繰り返す人も多いですね。バイク修次郎さんは、パチプロとして生きること生きづらさとか感じますか。

バイク修次郎：うん、パチプロ業界のなかにいれば別にしんどくないですけど、世間的にはなんかきついです。パチンコに対する風当たりが強いから。俺は、めっちゃめっちゃ負けた経験もしているし、勝った経験もしている。とにかく、俺、パチンコが好きなんです。ただ今は昔よりもパチンコへのバッシングがすごい。それが辛いかな。最近ほら、水原一平ちゃんが捕まって……。その影響で、依存症問題への見方が、なんか変な方向にいつちゃっているよね。「震災があったときもパチンコは悪だと言われていた」という話が、小西さんの発表でもありましたよね。けれど、自分、東日本大震災のときも、その年の4月末に現地のパチンコ屋さん取材で行ったんですよ。そこで、ホール店長さんとか、現地のパチンコファンの人にインタビューしたんですけど、「パチンコがあってほんまに助かった」って言ってたんですよ。それは震災で心がすごい……なんていうのかな、生きる勇気もないところで、パチンコ屋さんがオープンしたときに、泣きながらパチンコを打ったって言わはって、それはやっぱりセーフティネットの最たるものと思うから。エンタメというかね。そういう部分もあるわけだからね。世間はもうちょっとパチンコのネガティブな部分ばかり見ないで、いいところも見てくれてもいいんじゃないかな。私は毎日パチンコ屋にいますけれど、世間のイメージよりも、自分にとっては楽しい空間なんですよ。

マコト：まあでも結局、俺みたいに華々しく大学に入ってこういう感じに……

バイク修次郎：華々しいって自分で言うな！（場内 笑）

マコト：こういう感じになっている人間もいる半面、転落していく人も多いと思うねんな、パチンコで。借金をするとか、本人がよくても周りに迷惑をかけているということもある。社会的に見たらエンターテインメントとしては、お金がかかりすぎるどころはあるし、人生を棒に振る人もいるやろうね。

バイク修次郎：そういう人は、俺のセミナーに来てくれたらいい！

マコト：商売はじめたな。

バイク修次郎：それは冗談ですけど、やっぱり勝ち方を知れば、いい遊び方をしていれば、負けなくてすむんです。やめなくてすむんです。借金もしなくてすむんです。やっぱり自分の力をつけること。ここは大学ですけど、大学生の方も勉強したら、自分の実力が上がってね、やれることも増えてくるじゃないですか。知識も増えていく。それと同じで、パチンコも勉強せずにただ単にホールの言いなりになって打っていたら、絶対負けるんですよ。でも、ちょっと勉強すれば勝てる。これに気づかない人が多いから、9割の人が負けているのかな。だから、俺のセミナーに来てくれたらいいのになって思います。冗談ですけど。

ほんまに自殺を考えたことがあるぐらいの人からすると、今の依存症対策っていうのは、正直、間違った対策をしているなと思いますね。なんか表面上、やっているふりをしている依存症対策という感じがします。ああいうのってお金儲けとかも絡んでいるから、心底依存症対策をしてない、動いていないというふうに見えています。ほんまにパチンコとか他のギャンブルの依存症で苦しんでる人、本当に命をなくそうと思っている人、いっぱいいると思うんですよ。だからそういう人に寄り添う依存症対策を本気で国がやらないといけないし、そうすれば逆にもっと楽しく遊べる提案もできると思うんですよ。

マコト：立候補するの？

バイク修次郎：ははは。依存症に関しては、元依存症患者からしたら、言いたいことがいっぱいあるんですよ。

小西：盛り上がってきたところで大変残念なんですけれど、そろそろ時間が迫ってきてしまいました。最後に、みなさんがパチンコを打つ上で大切にしていることとか、パチンコをしていてよかったことがあれば、順番にお一人ずつコメントいただけると嬉しいです。大川さんからお願いします。

大川：大切にしていることについて、お話ししたいなと思います。一応パチプロっていうか、パチンコで生活している人たちって、期待値を重要視すると思うんです。でも、僕は、ライターとして雑誌でのお仕事もいただいていたのもあったからかもしれませんが、パチンコを打って生活していく上で大事にしていたのは、好きじゃない台は打たなくていいということです。好きな台で勝てる店をとことん探しに行くっていうスタイルだったので、一時期そういう台を追いかけて、片道一時間半とかかけてお店に行っていました。好きな台で勝ちたいから、その店に通っていたという時期もありました。当然パチンコを打つ人たちには、「この台好き」とか「この台おもしろくないな」みたいなものがあると思うんですけれど、どうせ打つんだったら好きな台で勝ちたいよねっていうのがあります。当たり前の話だと思うんですけれど。

だから勝ち方を覚えた上で、ちょっとした努力ってほどでもないですけど、ちょっと遠くまで行って、ちょっと早起きしてがんばって、ちょっと帰るのが遅くなるけれど、好きな台で勝つっていうことも大事にしているんじゃないかと思います。せっかくならね、好きな台を打ちたい、かつ、負けない。勝つとまではいかないけれど、負けを抑えるっていうことも可能だとは思って、勝ち方とか、負けを抑える方法を覚えた上でパチンコを実践してほしいなと、僕なんかは思います。これが、僕がパチンコで生活していたときに一番大事にしていたことですね。

ガリバー：僕はお店と共存していくっていうスタイルのパチプロなんです。「ジグマ」っていうんですけれど、いろんなお店を回っていくというより、特定のお店に飼っていただいているっていう立場で、勝たせてもらっているんですね。そのお店が用意してくれたいい台を打って勝たせていただいている。だから、さっき「パチンコ屋からお金を取るかどうか」という話もありましたけれど、僕はそのスタイルではなくて、結構同じお店にずっと行くタイプなので、お店に嫌われちゃうと、もう終わりなんです。なので、なるべくマナーよく過ごしたり、最低限のやっていいことと悪いことみたい

なこととかは気をつけたりしています。そこを細かくお話すると長くなるのではしょりますけれど、ここまでのラインはやるけれど、ここからはもう絶対手を出さないみたいな。たとえば、「この台は一般のお客さんが打つものだよ」っていう台には触りません。あと、ある程度勝ったら、「もう今日は帰っちゃおう」とかもよくやっている。そういうのは、結構意識してやっています。

マコト：僕はつまらない状況で打っていてもおもしろいと思えない。ぼったくり店というか、「絶対出さへんぞ！」みたいなところでパチンコを打って勝つっていうのが、一番今まで大事にしてきたことです。じゃあ何をすればいいのかと言ったら、店は釘については開けないんで、機械の隙を突く穴を突く、攻略法を自分で見つけてそれを実践する、それが一番大事にしてきたことです。さっきの話とちょっと被るんですけど、優良店とかのいい台は、一般の人が打つ台と思ってのんです。プロが一般の人のための台をやるのは、ちょっとどうかと思います。それはどうしてかっていうと、駆け出しの頃というか、最初の頃は釘を開けている店に行っては儲けていたっていうこともあったんですけども、やっぱりなんか飽きるというか、なんかしょうもないっていう感じになりました。「絶対出さへんぞ！」っていうところから出した方が興奮するっていう感覚が、一番近いのかもしれませんが。今までもこれからも、そういうことを大事にしていこうと思っているんです。

今、業界はどんどん斜陽化していて、店の体力もなくなってきていて、日本全国総ぼったくり店になってきているんです。そんななか、僕は戦うための武器をこれからも作りながらやっていきたい。でも、業界のことも嫌いじゃないんで、そこはさっきガリバーくんも言っていたんですけども、お店に気を使って、「もうこの辺で帰ろっかな」っていうのも、最近はかなり視野に入れてやっています。これからもそういう感じのところを大事にしておこうかなと思っている感じです。

丈幻：僕は先ほど紹介されたように、今、現役じゃないんです。4、5年間パチンコを打っていないんですけども、いつからパチプロになったのかも、今日からパチプロやめたっていうのも、厳密に考えるとはっきりはしていないんですね。何となく流れに乗っている感じで、いつ復活するかもわからないです。

姿勢としてはね、僕もマコちゃんに近いです。冬馬が言っていた「好きな台で勝つ」っていうのがまったくなくて。そういう意味での好きな台というのがなくて、そもそも儲かる台が好きな台なんです。最初つままないと思っても、「これ儲かるやん」ってなったら、それが好きな台になるというか、つままない演出も無理やりおもしろがっていました。

あと店との共存ということだと、それは少し考える。あっちこっち地方回ったりしているときなんかはもう焼畑農業みたいなね、ぶっ潰してダメになるまでとことん抜いて帰るみたいなことやっていました。でも、店との共存を考えたら、そんなやり方はできません。今はもう、そういう時代じゃないっていうこともありますけれどね。うん、ここにきてやっぱり、それぞれのスタイルの違いが出たかなと思います。

パチプロのスタイルとしての話をするとね、パチプロって本当に稼ごうと思ったら、24時間365日、パチンコのために、体を空けとかないとダメなんです。いつどんな



いい台が来るかわからない。朝見つけたこの台は、たぶん明日まで釘がこの状態であるわけではないから、もう絶対この台を12時間打つという選択肢しかなくなっちゃうんです。だから、すごく拘束されるんですね。次の日もいい台を打てるかどうかかわからないから。パチプロで稼ごうと思ったら、全然自由じゃなくなるんです。俺はさっきも紹介した池上蓮さんっていう有名なライターさん、もう10年以上前に亡くなりましたけれど、この方が「自由人になるためになったパチプロなのに、パチプロになってしまったためにまったく自由ではなくなった」というジレンマのことばかりを、晩年はずっと書いていたんです。うん、すごくよくわかる。パチプロの連中って、本当にね、先の約束をしてくれない人が多いんですよ。僕はいろんなイベントや飲み会とかを企画するんですけど、「この日にやるから来てくれ」とか言ったら、結構みんな来てはくれるんだけど、なかなか決定してくれない。当日まで決めない。当日の午後3時になっても「まだ行けない。もうちょっと待って」みたいな感じも多いよね。こういうふうに縛られちゃうんで、先の予定は決められない人が多いんです。そういうジレンマはあると思います。

だから僕はね、パチプロになったとしてもパチンコに人生の時間を奪われるような打ち方はしたくないです。多少は収入が減ってもいいけれど、自分の予定は自分で決めるなかでちゃんと稼げるんだっていう形でやりたい。最初の借金返すときは、本当に人生の時間を奪われていました。借金を返すことが目的だったから。でも、ある程度余裕をもってね、「自由人としてのパチンカー」というのでやっていきたいから、これからパチプロに戻るとしたら、それが理想だなという話です。

バイク修次郎：僕は依存症になった後、勝ち方を覚えた年の3年後ぐらいかな。海物語という優秀台を探しやすい機種があるんですが、私、2004年に海物語を年間3200時間打ったんですよ。一日12時間打つのを、ざっくり300日続けてやりました。そのとき、何も他のことができなかったんです。ただただお金を稼げたんでやりましたけれど、やっぱり時間っていうのは人生であり、とても大事だから、うまくパチンコとつき合わないといけないと思いました。あとは、さっきガリバーさんが言われていた、店との共存ですね。打つスタイルはガリバーさんと同じなのかな。店ありきってことで。トータル店には感謝していますね。

最後に、ここに来てくださっているみなさん、パチンコを打っている方も打っていない方もいらっしゃると思いますけれど、ぜひパチンコを打ってください。おもしろいんで。うまくつき合えば、本当におもしろいゲームです。ここに来てくださっている方は、本当に恵まれていると思います。パチンコはほぼ勝てますからね。上手くやれば必ずと言っていい程、勝てますから。その際には、『パチンコ必勝ガイド』を参考にしてください。パチンコ初心者から上級者までを対象にしています。はい、CMに入ります。さっき紹介したセミナーはね、ちょっと敷居が高いかもしれませんが、雑誌とかYouTubeなんかでも、勝つための情報はいろんなところでいっぱい出ています。大阪大学は勉強熱心な方が多いと思うので、パチンコもしっかり学べば、うまくつき合えば、勝てるゲームなんです。ぜひパチンコを打ってください。

小西：パチプロのみなさま、興味深いお話を本当にありがとうございました。私は仕



事に追われて自由を奪われている毎日ですが、もっと自由になるための一環として、余裕を見つけてパチンコを打ちに行きたいです。それでは対談はここまでにして、質疑応答にうつりたいと思います。どうもありがとうございました。

#### 謝辞

本対談内容を文字化するにあたって、登壇者のおひとりでもある丈幻さんには、専門的な知見からの修正、補足説明の加筆等のためにご尽力いただきました。心よりお礼申し上げます。

(じょうげん、マコト、ガリバー、おおかわ・とうま)

(こにし・まりこ)

(バイクしゅうじろう)